図書館界の国際交流 -IFLAシンガポール大会-

メタデータ	言語:
	出版者: 日本図書館協会
	公開日: 2024-01-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 三浦,太郎
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000192

小特集★IFLA シンガポール大会レポート

図書館界の国際交流：IFLA シンガポール大会

三浦太郎

今年８月17～23日，「世界図書館情報会議（WLIC）：第79回 IFLA 年次大会」（IFLA シンガポール大会）がサンテック・シンガポール国際会議場で開催された。テーマは「未来の図書館：無限の可能性」である。東南アジア地域では1980年の第46回マニラ大会（フィリピン），1999年の第65回バンコク大会（タイ）以来，３度目の開催となった。

▲国際会議場にて

現地日本人会図書室の見学

会期中の８月19日午後には，アダムロード地区の日本人会会館図書室を訪問する機会を得，日本からの大会参加者20名が見学した。訪問にあたっては，事前に同会館事務局長の杉野一夫氏と連絡をとり，当日は事務局の池上さつき氏，および図書館ボランティアの方々に対応いただいた。

日本人会の前身である共済会は1889（明治22）年に発足している。1912（大正元）年には，ミドルロードの東洋ホテル内に「新嘉坡日本小学校」が開設され，教師１人，生徒26人の教育体制が敷かれた。当時，シンガポールには約1,500人の在留邦人が居住していたが，1915年に正式に日本人会が発足し，日本小学校の運営も引き継がれた。

その後，太平洋戦争さなかの1941（昭和16）年に日本領事館が閉鎖され，日本人会もいったん消滅したが，1957年に再結成された（1975年まで名称は「ジャパン・クラブ」である）。1966年には日本人学校も再開され，1998（平成10）年に，リー・シュンロン副首相（当時）を迎えて現在の新会館の落成式が行われた。新会館は総床面積7,800㎡，４階建ての近代建築である。２階に図書室，１階に子ども図書室とキッズコーナーが設けられ，約5.5万冊が所蔵されている。

日本人会の会員数は，正会員（日本国籍保持者）5,229名，会友（日本人以外の会員）370名，および法人会員760社である（2013年９月現在）。事業としては，会員相互の親睦を図り，200名収容のオーディトリアムをはじめとする，在留邦人の憩いの

▲日本人会会館スタッフとの交流

場を提供しているほか，日本人学校の運営や日本人墓地の管理，診療所の開設を行っている。また，チャリティ・文化活動を通じて日星友好に寄与しており，職員８名とボランティア９名の体制を敷いている。

図書購入予算は年間５万Ｓドルが措置されており，現地の紀伊國屋書店で発注するほか，スタッフが帰国した際，関心を呼びそうな図書を見つけているという。毎週土曜日昼には，子ども用図書室で「読み聞かせ会」が開かれ，親子連れが多く来館している。現地の日本人コミュニティの図書館として機能していることが，最大の特徴であると言える。昨年，図書貸出が５％減少したことが目下の懸案事項であるそうで，IFLA 大会参加者とスタッフが懇談した際にも，日本も同じような状況があり，対策について話し合われた。

大会概要

さて，本誌10月号NEWS欄に既報のとおり，本大会では初日に分科会やグループの会合が設定され，翌18日に開会式が開かれた。大会参加者は120以上の国と地域から3,750名を数え，220を超えるセッション（このうち公開約100），85の企業展示ブース，ポスター発表130件が集まった。また，「文化の夕べ」（20日），総会（21日），閉会式（22日）などが行われ，最終日の図書館ツアー（26館）を以て幕を閉じた。

日本からの参加者は40名超である。このうち，河村宏氏（特定非営利活動法人支援技術開発機構）ら９名がセッション発表したほか，鈴木史穂氏（福島県立図書館）ら７名がポスター発表を行い，鈴木氏による「福島の図書館員（The Librarians of Fukushima）」が見事，最優秀ポスター賞に輝いた[1)]。

公開セッションのうち[2)]，ここでは，筆者も委員の一人となっている図書館協会運営分科会（MLAS）が，著作権等法的問題委員会（CLM）と共同で開催した「電子書籍の未来を探る」（19日9:30～12:45）を紹介しておきたい。このセッションでは，米国，オーストラリア，シンガポール，チリ，南アフリカ共和国，および欧州図書館・情報・ドキュメンテーション協会連合（EBLIDA）の事例報告が行われ，各地域の置かれた状況の多様性が感じられる内容であった。

▲ポスターを前に鈴木史穂氏

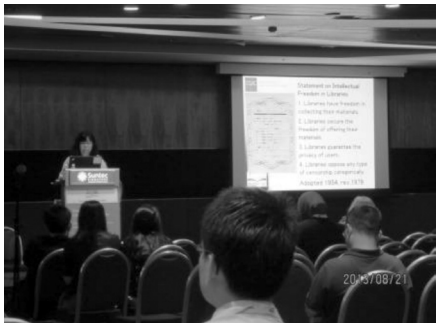
シンガポールでは，携帯電話・スマートフォンは普及しているが，電子書籍はあまり普及していない（ケニー・チャン氏）。アフリカでは，そもそも電子書籍をほとんど手にすることができず，ケニアで2012年からeKitabuが導入されたばかりである（マイセラ・マエパ氏）。

いっぽう，オーストラリアでは国内公共図書館1,500館の67％で電子書籍が貸し出されており，２年後に98％まで高まることが見込まれている（マーガレット・アレン氏）。また，米国では，米国図書館協会（ALA），出版社（ハーパーコリンズほか６社），作家協会の三者間の協議が始まり，ライセンスと所有の問題，著作権侵害，図書館における貸出制限の有無，フォーマットの多様さと図書館システムの整合性などについて，話し合われるようになったという（キース・フィールズ氏）。

電子資料をめぐる利用者からの期待に，図書館がどこまで応えることができるのか。各国・地域で抱える問題を話し合い，解決に向けて問題認識が共有されたことは，国際会議を開く意義のひとつであったと言えよう。

分科会会議

IFLA分科会とコア・アクティビティには，現在，日図協から10名の日本人関係者が委員として参加している。委員各位にはご多用中のところご参加いただき，この場を借りて御礼申し上げる。



▲公開セッションの様子

筆者の所属するMLASでは，19日に前述のセッション「電子書籍の未来を探る」が行われたほか，17日12:30～15:00と22日8:00～9:30の２回，会議が開かれ，20日16:00～18:00にはジェニファー・ニコルソンIFLA事務局長の主催する国立図書館協会会議（公開セッション）に招かれた。

一連の会議では，IFLA理事会（GB）報告，2013年２月の冬季会議の報告，関連の特別研究グループ（SIG）（新たな図書館員職グループ（NPSIG）と女性情報図書館グループ（WILSIG））の報告があり，現分科会議長のジェラルド・ライトナー氏（オーストリア図書館協会会長）の再選も無投票で決まった。

また，17日の会議にはイングリッド・パランIFLA会長，シニッカ・スピーラ次期会長も出席し，在任中の総括と今後の活動方針を発表した。加えて，IFLA執行部のスチュアート・ハミルトン氏から，知的財産権をめぐる世界知的所有権機関（WIPO）の動きについて報告があり，フィオナ・ブラッドリー氏からは「強力な図書館協会設立（BSLA）プログラム」に対し，ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団より，総額じつに10億ドルに上る援助が決まったことが報告された。会議には16名の正規委員（４名が欠席）のほか，各国図書館協会の会長・事務局長ら約20名がオブザーバとして列席した。

20日の国立図書館協会会議は討論型で開かれた。参加者は各テーブル６～７人ずつに分かれ，IFLAトレンド・レポートで焦点に挙げられた次の五つの事項を協議した。

(1) トレンド１：新たな技術は，情報へのアクセス権をもつ人びとを，拡大させる側面と制限する側面をもつ
(2) トレンド２：オンライン教育は，グローバルな学習を，民主化する側面と崩す側面がある
(3) トレンド３：プライバシーとデータ保護の境界は，再定義される
(4) トレンド４：高度に結合された社会では，人びとの新たな声に耳が傾けられ，新しい集団がより力をもつ
(5) トレンド５：グローバルな情報経済は，新たな技術によって変貌を遂げる

最後に，来年は８月16～22日にフランス・リヨンでIFLA大会が開かれ，翌2015年は南アフリカ共和国ケープタウンでの開催となる（８月13～21日）。IFLA分科会委員の方々をはじめ，現場の図書館員，大学の研究者，大学院生など，関係の皆さまのご参加を心よりお待ち申し上げます。

［注］いずれも最終アクセス日は2013年10月28日

1）「E1478-IFLAでベストポスター賞を受賞の鈴木史穂さんにインタビュー」『カレントアウェアネス-E』No.245，2013.09.26［http://current.ndl.go.jp/e1478］
　また，同号には天野絵里子氏（九州大学附属図書館）によるIFLAシンガポール大会の紹介も載せられている。「E1479-シンガポールで「未来の図書館」を考える：IFLA WLIC 2013」［http://current.ndl.go.jp/e1479］

2）各セッションの発表資料の多くは，IFLAホームページ「プログラムと会議録」［http://library.ifla.org/view/conferences/2013/］で見ることができる。以下の参加記も参照されたい。古賀崇「世界図書館・情報会議：第79回IFLA（国際図書館連盟）年次大会」『情報管理』Vol.56，No.8，2013，p.556-561.

（みうら　たろう：JLA国際交流事業委員会委員長，明治大学）

［NDC 9：010.6　BSH：国際図書館連盟］